

令和5年度 シラバス

科目名	リハビリテーション特論 (30)時間	前期	第Ⅱ学科3学年	講 師	谷 裕武 (オムニバス)
実務経験	谷 裕武:理学療法士として15年以上の実務経験あり 森垣 浩一:理学療法士として19年以上の実務経験あり 金島 理恵:理学療法士として15年以上の実務経験あり 久保けい子:理学療法士として13年以上の実務経験あり 久常 昌美:理学療法士として8年以上の実務経験あり 橋本 貴之:理学療法士として14年以上の実務経験あり 丹野 晴臣:理学療法士として7年以上の実務経験あり 吉田 峻 :理学療法士として14年以上の実務経験あり 山中 克也:理学療法士として17年以上の実務経験あり 安田 美紀:理学療法士として11年以上の実務経験あり				
到達目標	栄養、薬理、医用画像、救急救命及び予防の基礎について学ぶ				
履修上の注意	臨床及び国家試験に直結した内容として緊張感を持って臨むこと				
成績評価方法	学科試験、小テストを含めた総合評価				
教科書	特になし				
参考書					

回 数	項 目	授業内容
第1回目	栄養学 ①	三大栄養素
第2回目	栄養学 ②	栄養と代謝
第3回目	画像診断(整形外科)	整形外科疾患の画像理解
第4回目	臨床検査 ①	血液データの読み方・胸部レントゲン
第5回目	臨床検査 ②	検査データの読み方
第6回目	画像診断(中枢神経疾患)	中枢神経疾患の画像理解
第7回目	画像診断(内部疾患)	内部疾患の画像理解
第8回目	救急救命 ①	一次救命処置
第9回目	救急救命 ②	心肺蘇生とAED
第10回目	薬理 ①	薬の作用、副作用
第11回目	薬理 ②	薬の作用、副作用
第12回目	排痰と吸引 ①	排痰手技とスクイーピングについて
第13回目	排痰と吸引 ②	喀痰吸飲について(口腔内・鼻腔内吸引)
第14回目	予防医学 ①	一次予防について
第15回目	予防医学 ②	二次予防・三次予防について
備考		

令和5年度 シラバス

科目名	保健医療福祉制度論 (30)時間	前後期	第Ⅱ学科3学年	講師	久常 昌美
実務経験	理学療法士として8年以上の実務経験あり				
到達目標	わが国の社会保障制度の理解				
履修上の注意	パワーポイントを用いて講義を行います。				
成績評価方法	本試験100% 出席状態も加味します				
教科書	なし (プリント配布)				
参考書	配布資料				

回数	項目	授業内容
第1回目	社会保障	総論 社会保障制度の仕組み
第2回目	医療保険Ⅰ	社会保険(協会管掌健康保険)について
第3回目	医療保険Ⅱ	国民保険(国民健康保険)について
第4回目	後期高齢者医療	長寿医療制度(老人医療制度から後期高齢者医療制度へ)
第5回目	介護保険制度Ⅰ	制度の成り立ち
第6回目	介護保険制度Ⅱ	制度の内容
第7回目	労働者保険Ⅰ	労働災害保険について
第8回目	労働者保険Ⅱ	雇用保険について
第9回目	障害者総合支援法Ⅰ	制度の変遷
第10回目	障害者総合支援法Ⅱ	制度の内容
第11回目	年金保険Ⅰ	総論 年金とは
第12回目	年金保険Ⅱ	国民年金
第13回目	年金保険Ⅲ	厚生年金
第14回目	まとめⅠ	まとめ ①
第15回目	まとめⅡ	まとめ ②
備考	講義の進捗により、変更いたします。	

令和5年度 シラバス

科目名	理学療法管理学 (30)時間	前後期	第Ⅱ学科3学年	講師	谷 裕武
実務経験	理学療法士として15年以上の実務経験あり				
到達目標	理学療法士としての知識や技術を患者に提供する際に必要な、マネジメント能力を身につける				
履修上の注意	不明な点は遠慮なく質問する				
成績評価方法	学科試験(100%) 出席状況も加味します				
教科書	15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト 理学療法管理学(中山書店)				
参考書					

回数	項目	授業内容
第1回目	総論	理学療法管理学の源流
第2回目	病院の分類と組織	「医療法」における医療と医療圏、医療機関
第3回目	専門職とチームケア	チームケアの必要性とその背景
第4回目	社会保障のしくみ	社会保障の構成要素とその役割
第5回目	医療保険制度	医療保険制度の歴史
第6回目	介護保険制度	介護保険制度の特徴
第7回目	診療・介護報酬と収益構造	医療・リハビリテーションの値段
第8回目	保健・医療・介護・福祉の連携	保健・医療・介護・福祉の連携の概要
第9回目	業務管理	理学療法士の業務の流れ
第10回目	情報管理	理学療法の業務に必要な情報と診療記録の分類
第11回目	リスク管理	医療、介護におけるコンプライアンス
第12回目	感染症管理	感染と感染症
第13回目	権利擁護と職業倫理	インフォームド・コンセント
第14回目	教育管理	臨床実習の管理
第15回目	理学療法士の政治・政策への関与	理学療法士が政治に関与しなければならない理由
備考		

令和5年度 シラバス

科目名	義肢装具学Ⅱ (30)時間	前後期	第Ⅱ学科3学年	講師	金島 理恵
実務経験	理学療法士として15年以上の実務経験あり				
到達目標	切断のリハビリテーションにおいて、理学療法士は断端機能を改善させ、適合した義肢で日常生活動作が獲得できるように理学療法を実施する。そのために必要な切断リハビリテーションの流れや、義肢の基本的な構造や機能を学習する。				
履修上の注意	毎授業の復習をしっかりと行うこと				
成績評価方法	筆記試験100%				
教科書	15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト 義肢学(中山書店)				
参考書	必要に応じて配布する				

回数	項目	授業内容
第1回目	義肢総論	上肢切断・離断の部位 下肢切断・離断の部位
第2回目	切断疫学	切断の原因疾患について
第3回目	切断の合併症	幻肢について 好発する拘縮について
第4回目	継手について	膝継手・足継手について
第5回目	大腿義足①	四辺形ソケットについて
第6回目	大腿義足②	坐骨収納型ソケットについて
第7回目	下腿義足①	PTB・PTSソケットについて
第8回目	下腿義足②	KBM・TSBソケットについて
第9回目	サイム義足	サイム義足の利点・欠点
第10回目	確認テスト	範囲:ソケット
第11回目	異常歩行①	代表的な異常歩行
第12回目	異常歩行②	代表的な異常歩行
第13回目	異常歩行③	代表的な異常歩行
第14回目	切断の理学療法	切断の理学療法・ADLについて
第15回目	まとめ	試験対策 範囲:異常歩行
備考		

令和5年度 シラバス

科目名	高齢者理学療法学 (30)時間	前後期	第Ⅱ学科3学年	講師	橋本 貴之
実務経験	理学療法士として14年以上の実務経験あり				
到達目標	近未来の日本の社会背景(超高齢者社会・2025年問題)を十分に理解し、これからの社会が求めているリハビリ職として、幅広い知識や得て、臨床現場(特に在宅・介護保険サービス)で存分に活躍できる理学療法士となることを目指す。				
履修上の注意	講義を聴く受動的な授業方針にならないようにする。会話を重んじた能動的で自主性に富んだ授業をめざす。				
成績評価方法	最終週(15コマ終了後)に試験(100点)と出席状況				
教科書	毎授業時、専用資料を配布する				
参考書					

回数	項目	授業内容
第1回目	高齢者理学療法学の概念・基礎的理解	教科書に基づき、高齢者理学療法・GD発表を通して学びを深める
第2回目	高齢者社会の実態	現在の高齢者人口や寿命など過去や未来動向を理解する。
第3回目	高齢者の生体・実態について	レポート課題提出にて履修とする①
第4回目	高齢者に対して理学療法士が行えること	レポート課題提出にて履修とする②
第5回目	老年症候群について	老年症候群の分類と意義 (フレイル・サルコペニアのメカニズム)
第6回目	高齢者の特徴①	転倒・低栄養・尿失禁・嚥下障害について理解する
第7回目	高齢者の特徴②	加齢に伴う生理機能の変化(呼吸・循環器・ホルモン・感覚器)
第8回目	高齢者の特徴③	加齢に伴う生理機能の変化(体力の変化・姿勢・歩行の変化・記憶・人格)
第9回目	老年学について補足	様々な、認知症の分類・特徴・評価方法・認知症の事例紹介
第10回目	高齢者の身体機能評価①	画像診断(CT・MRI)、運動評価(7分間歩行・重心動揺計・FIM・バーセル)
第11回目	高齢者の身体機能評価②	日常生活活動の評価(FIM・BI・ICF)・行動変容について
第12回目	高齢者への理学療法の実態	筋力増強訓練・バランストレーニング・持久力・活動促進へのアプローチ
第13回目	高齢者と理学療法士の社会的立場	継続される、国の施策への対応法 理学療法士の歩む道(GD)地域との関わり
第14回目	事例検討・演習	転倒・骨折予防・フレイルに対する事例、高齢者疾患の事例検討
第15回目	まとめ	高齢者全般的に総括(GD・動画など)イメージの拡大
備考		

令和5年度 シラバス

科目名	スポーツ障害理学療法学 (30)時間	前後期	第Ⅱ学科3学年	講師	橋本 貴之
実務経験	理学療法士として14年以上の実務経験あり				
到達目標	代表的なスポーツの障害と治療の実態を理解する。パフォーマンスの向上まで理学療法より学習する。				
履修上の注意	グループディスカッション等を用い、受動的にならず、能動的に授業に参加できること				
成績評価方法	期末試験(80%)、中間試験(20%)				
教科書	授業用資料配布、毎回				
参考書					

回数	項目	授業内容
第1回目	スポーツ理学療法の概念	スポーツ理学療法の定義 プロスポーツとPTの関わり、教科書
第2回目	リハビリテーションの基礎知識	一般的なスポーツ外傷・障害の基礎知識やRICE療法など
第3回目	理学療法評価とスポーツ①	メディカルチェック、関節可動域検査・形態測定からのスポーツ評価
第4回目	理学療法評価とスポーツ②	スポーツ損傷 30種 より選択(個人・班)まとめ
第5回目	スポーツ現場の治療	スポーツ損傷 30種 発表会(個人・班)
第6回目	中間まとめ	確認テスト
第7回目	各論①	スポーツと「頸椎・肩関節疾患」
第8回目	各論②	スポーツと「腰椎・骨盤疾患」
第9回目	各論③	スポーツと「膝関節疾患」
第10回目	各論④	スポーツと「下腿・足関節疾患」
第11回目	各論⑤	スポーツと「肘・手関節疾患」
第12回目	各論⑥	スポーツと「内部疾患」
第13回目	実技(模擬症例)①	症例検討・評価法・治療法(関節可動域訓練)
第14回目	実技(模擬症例)②	実技 ストレッチ・マッサージ・テーピング
第15回目	国家試験関連 まとめ	スポーツ理学療法分野 国家試験問題 および解説 まとめ
備考		

令和5年度 シラバス

科目名	理学療法学総合演習 I (30)時間	後期	第Ⅱ学科3学年	講師	谷 裕武
実務経験	理学療法士として15年以上の実務経験あり				
到達目標	臨床総合実習に向けた必要な知識の習得				
履修上の注意	講義を聴く受動的な授業方針にならないようにする。会話を重んじた能動的で自主性に富んだ授業をめざす。				
成績評価方法	出席・講義態度(20点) 実技テスト(80点) 合計100点				
教科書	PT・OTのための臨床技能とOSCE コミュニケーションと介助・検査測定編(金原出版) リハビリテーション基礎評価学(羊土社)				
参考書	必要時プリント配布 各評価学教科書				

回数	項目	授業内容
第1回目	臨床技能とOSCE①	理学療法プロセスの確認 OSCEテストの説明
第2回目	臨床技能とOSCE②	ROM検査① 実技演習
第3回目	臨床技能とOSCE③	MMT検査① 実技演習
第4回目	臨床技能とOSCE④	実技演習
第5回目	臨床技能とOSCE⑤	筋の触診 実技演習
第6回目	臨床技能とOSCE⑥	実技演習
第7回目	臨床技能とOSCE⑦	感覚検査・反射検査① 実技演習
第8回目	臨床技能とOSCE⑧	脳卒中麻痺側運動機能評価/脳神経検査 実技演習
第9回目	臨床技能とOSCE⑨	実技演習
第10回目	臨床技能とOSCE⑩	実技演習
第11回目	臨床技能とOSCE⑪	模擬担当症例揭示 I
第12回目	臨床技能とOSCE⑫	グループ内で情報収集・検査測定①
第13回目	臨床技能とOSCE⑬	検査測定②・統合と解釈・問題点抽出・ゴール設定
第14回目	臨床技能とOSCE⑭	治療プログラムの実演 レジユメの作成・提出
第15回目	臨床技能とOSCE⑮	確認試験
備考	班単位にて実施	

令和5年度 シラバス

科目名	理学療法学総合演習Ⅱ (30)時間	前期	第2学科3学年	講師	谷 裕武
実務経験	理学療法士として15年以上の実務経験あり				
到達目標	理学療法プロセスの内容(実技、評価、動作指導)を理解する				
履修上の注意	主体的に参加すること				
成績評価方法	実技試験、授業態度、筆記試験などを総合的に判定する				
教科書	配布資料にて実施する				
参考書					

回数	項目	授業内容
第1回目	理学療法プロセス	理学療法プロセスの確認 OSCEテストの説明
第2回目	実技演習①	ROM実技演習と復習
第3回目	実技演習②	MMT実技演習と復習
第4回目	実技演習③	移乗等介助の実技演習
第5回目	実技演習④	筋・骨の触診実技演習
第6回目	実技演習⑤	感覚検査・反射検査実技演習
第7回目	実技演習⑥	失調検査 立位バランス検査実技演習
第8回目	実技演習⑦	杖などの指導実技演習
第9回目	実技演習⑧	脳卒中麻痺側運動機能評価/脳神経検査 実技演習と復習
第10回目	実技演習⑨	バイタル測定の実技と復習
第11回目	実技演習⑩	車いす駆動(ギャッジアップなど)の指導、実技演習
第12回目	実技演習⑪	グループ内で情報収集・検査測定①
第13回目	実技演習⑫	統合と解釈・問題点抽出・ゴール設定
第14回目	実技演習⑬	問題点の検証と治療プログラムの立案
第15回目	実技演習⑭	最終評価と考察について
備考		

令和5年度 シラバス

科目名	国家試験対策総合演習 (120)時間	後期	第Ⅱ学科3学年	講 師	谷 裕武 (オムニバス)
実務経験	谷 裕武:理学療法士として15年以上の実務経験あり 森垣 浩一:理学療法士として19年以上の実務経験あり 金島 理恵:理学療法士として15年以上の実務経験あり 久保けい子:理学療法士として13年以上の実務経験あり 久常 昌美:理学療法士として8年以上の実務経験あり 橋本 貴之:理学療法士として14年以上の実務経験あり 丹野 晴臣:理学療法士として7年以上の実務経験あり 吉田 峻 :理学療法士として14年以上の実務経験あり 山中 克也:理学療法士として17年以上の実務経験あり 安田 美紀:理学療法士として11年以上の実務経験あり				
到達目標	3年次までに学習した全内容を踏まえて、国家試験合格を目指す				
履修上の注意	全教員がオムニバス形式でそれぞれの専門分野を担当します。欠席しないように注意すること。				
成績評価方法	理学療法士国家試験と同じ形式の問題200問 原則60%以上で認定とする				
教科書	理学療法士・作業療法士国家試験必修ポイント4冊(医歯薬出版) 配布した過去問10年分				
参考書	各自国試対策にて準備している参考書				

回 数	項 目	授業内容
第1・2回目	基礎医学分野 ①	解剖生理学 ①
第3・4回目	基礎医学分野 ②	解剖生理学 ②
第5・6回目	基礎医学分野 ③	解剖生理学 ③
第7・8回目	基礎医学分野 ④	解剖生理学 ④
第9・10回目	基礎医学分野 ⑤	運動学 ①
第11・12回目	基礎医学分野 ⑥	運動学 ②
第13・14回目	基礎医学分野 ⑦	人間発達学
第15・16回目	臨床医学分野 ①	病理学

第17・18回目	臨床医学分野 ②	内科学
第19・20回目	臨床医学分野 ③	骨関節障害と臨床医学
第21・22回目	臨床医学分野 ④	中枢神経・末梢神経・筋の障害と臨床医学
第23・24回目	臨床医学分野 ⑤	精神障害と臨床医学
第25・26回目	臨床医学分野 ⑥	臨床心理学
第27・28回目	臨床医学分野 ⑦	小児・老年期障害と臨床医学、リハビリテーション医学・概論
第29・30回目	基礎理学療法学分野 ①	基礎理学療法学 ①
第31・32回目	基礎理学療法学分野 ②	理学療法評価学 ①
第33・34回目	基礎理学療法学分野 ③	理学療法評価学 ②
第35・36回目	基礎理学療法学分野 ④	理学療法評価学 ③
第37・38回目	基礎理学療法学分野 ⑤	理学療法治療学 ①
第39・40回目	基礎理学療法学分野 ⑥	理学療法治療学 ②
第41・42回目	基礎理学療法学分野 ⑦	理学療法治療学 ③
第43・44回目	基礎理学療法学分野 ⑧	地域理学療法学
第45・46回目	傷害別理学療法治療学分野 ①	骨関節障害 ①
第47・48回目	傷害別理学療法治療学分野 ②	骨関節障害 ②
第49・50回目	傷害別理学療法治療学分野 ③	中枢神経障害 ①
第51・52回目	傷害別理学療法治療学分野 ④	中枢神経障害 ②
第53・54回目	傷害別理学療法治療学分野 ⑤	末梢神経・筋障害
第55・56回目	傷害別理学療法治療学分野 ⑥	呼吸・循環・代謝障害
第57・58回目	傷害別理学療法治療学分野 ⑦	運動・発達障害
第59・60回目	傷害別理学療法治療学分野 ⑧	その他障害(熱傷、がん、有痛性疾患、廃用症候群)
備考		

令和5年度 シラバス

科目名	理学療法学研究論 (60)時間	前後期	第Ⅱ学科3学年	講師	森垣 浩一
実務経験	理学療法士として19年以上の実務経験あり				
到達目標	理学療法における研究の意義や方法を理解する				
履修上の注意	予習復習に努めること。				
成績評価方法	小テスト・中間試験・定期試験				
教科書	資料配布				
参考書					

回数	項目	授業内容
第1・2回目	各論 ①	統計学の基礎
第3・4回目	各論 ②	データの尺度・特性値・グラフ
第5・6回目	各論 ③	推定と検定の基礎
第7・8回目	各論 ④	2標本の差の検定
第9・10回目	各論 ⑤	1標本の差の検定
第11・12回目	各論 ⑥	差の検定
第13・14回目	各論 ⑦	相関
第15・16回目	各論 ⑧	回帰分析
第17・18回目	各論 ⑨	重回帰分析
第19・20回目	各論 ⑩	分割表の検定
第21・22回目	各論 ⑪	一元配置分散分析
第23・24回目	各論 ⑫	反復測定分散分析
第25・26回目	各論 ⑬	信頼性係数
第27・28回目	各論 ⑭	多重ロジスティック回帰分析
第29・30回目	各論 ⑮	診断の指標
備考		

令和5年度 シラバス

科目名	生活環境学 (30)時間	前後期	第Ⅱ学科3学年	講師	谷 裕武
実務経験	理学療法士として15年以上の実務経験あり				
到達目標	神経学的検査の理解と実技の習得				
履修上の注意	実技を行う場合は実習着を着用しておくこと				
成績評価方法	定期試験70%、小テスト・出席状況・授業への取り組み30%(合計100%)				
教科書	資料配布				
参考書	ベッドサイドの神経の診かた(南山堂) 理学療法評価学(金原出版)				

回数	項目	授業内容
第1回目	日常生活動作(ADL)、ICF、QOLの概念と構造	日常生活動作(ADL)、ICF、QOLの概念・背景を理解する
第2回目	ADL評価の歴史 臨床現場でのADL評価	ADLの歴史の理解・臨床現場でのADLイメージ想起を行える
第3回目	ADLと動作分析の関連 (歩行・立ち上がり)	トップダウン・ボトムアップ課程をADL評価の側面より理解する
第4回目	バーサル・インデックスの採点	模擬症例をたて、実際に点数付ける。フィードバックより理解を深める
第5回目	FIM 運動項目・認知項目の採点	模擬症例をたて、実際に点数付ける。フィードバックより理解を深める
第6回目	補装具(杖・車いす関連)	移動補助具の特徴を説明できる
第7回目	起居・移動動作(座位姿勢保持、寝返り・起き上がり動作)	(実演)日常生活動作の再確認であり、自発的な意見で説明できる
第8回目	床上移動・車いす駆動・杖歩行・段差	(実演)日常生活動作の再確認であり、自発的な意見で説明できる
第9回目	小テスト (日常生活動作において)	知識・授業習得の確認
第10回目	食事動作・トイレ動作・入浴動作・整容動作・更衣動作	セルフケア動作の基礎的な認識を習得する
第11回目	福祉用具 ADLを支える機器、自助具の説明	症例に対し福祉用具などの選定をしてもらい、実用性を旨す
第12回目	中枢神経障害に対するADL指導	脳卒中、パーキンソン病、脊髄損傷(起き上がり・移乗方法)の習得
第13回目	運動器障害に対するADL指導	関節リウマチ、大腿骨頸部骨折、膝OA(立ち上がり・段差)の習得
第14回目	臨床的(模擬)実例のグループワーク(退院→自宅復帰)	GD(グループディスカッション)コミュニケーションを取りゴールを導く
第15回目	国家試験問題の説明	過去問を通して理解を深める
備考		

令和5年度 シラバス

科目名	地域理学療法学 (30)時間	前後期	第Ⅱ学科3学年	講師	橋本 貴之
実務経験	理学療法士として14年以上の実務経験あり				
到達目標	移り行く現代社会に適応できる地域理学療法学としての幅広い知識を学び・地域の対象者に、アイデアを駆使した実践的取り組みができるようになる。				
履修上の注意	一方的に講義を聴く受動的な授業方針にならないようにする。能動的で自主性に富んだ授業をめざす。				
成績評価方法	中間試験(20点)・定期試験(80点) 合計100点				
教科書	専用資料を毎回配布する				
参考書	随時紹介する				

回数	項目	授業内容
第1回目	地域理学療法学 の概念	教科書に基づき、「地域理学療法とは」概念を学ぶ。
第2回目	地域における理学療法士の役割	日本の高齢者の動向・診療報酬について(動画より)
第3回目	疾患と障害の理解①	小児期・成人期・老年期の生活の理解を学ぶ
第4回目	疾患と障害の理解②	神経難病・パーキンソン病・ALSの生活の理解を学ぶ
第5回目	介護保険	訪問・通所リハビリテーションについて動画・発表を通して学びを深める
第6回目	各論①	多職種連携・障害者総合支援法について
第7回目	各論②	サルコペニア・フレイル・転倒・認知症について
第8回目	各論③	延命治療・看取り・コロナ(動画よりGDにて学ぶ)
第9回目	各論④	「小児看取り」動画を通して命について考える。
第10回目	事例検討・演習①	模擬症例① 一般的情報・社会的情報・医学的情報収集
第11回目	事例検討・演習②	模擬症例② FIMへの考察・検査項目の列挙
第12回目	個別支援の技術	本館3Fを利用し、福祉用具と住環境の整備について学ぶ
第13回目	事例検討・演習③	模擬症例③ 神経難病・及び(ICF)への検討
第14回目	地域包括ケアシステム	地域包括ケアシステムについて動画・発表を通して学びを深める
第15回目	まとめ	地域理学療法学領域(リハビリテーション概論)国家試験問題
備考		

令和5年度 シラバス

科目名	臨床総合実習 I (315)時間	前期	第Ⅱ学科3学年	講 師	専任教員 臨床実習指導者
到達目標	1. 臨床評価実習の目標に加え、下記を満たせる様に努力する。 2. 指導を受けながら、障害構造から問題点を列挙し、優先順位をつける。 3. 挙げられた問題に対して対応の要点等を記述し、プログラム立案の助言を受ける。 4. 可能であれば、指導を受けながら安全に運動療法等に介入(運動強度、頻度、観察など)を行う。				
履修上の注意	各実習施設に応じて準備すること。				
成績評価方法	実習前評価[OSCE](20%)、実習施設評価(60%)、実習後評価[実習報告会](20%)				
教科書	特になし				
参考書	購入したすべての教科書				

講義計画・講義内容	
1. 実習は臨床実習施設において7週間行われる。 2. 内容は、各施設における実習指導者の指導・監督の下、実際の症例に対して理学療法評価(情報収集・記録・統合と解釈)を行い、治療計画を立案・実施する。 3. これまでの授業で学んだ知識や技術を総動員し、実際の臨床現場での様々な症例に対して理解を深める。 4. 学内においては実習前に実習前実技試験、実習終了後に実習報告会(発表)を行う。	
臨床総合実習 I は、これまでに受けた教育の総合的な修練の場と位置づけることができる。この総合的な臨床実習は、評価、測定、治療、プログラムの作成までを考え、さらに臨床実習指導者の指導・監督の下で、治療の一部を実施し、その適否や有効性について考察できる能力を養う。	
備考	

令和5年度 シラバス

科目名	臨床総合実習Ⅱ (315)時間	後期	第Ⅱ学科3学年	講 師	専任教員 臨床実習指導者
到達目標	1. 以下の総合臨床実習Ⅰの目標が、可能な限り複数の症例に対して行えることを目標とする。 2. 指導を受けながら、症例の障害構造から問題点を列挙し、優先順位をつける。 3. 挙げられた問題に対して対応の要点等を記述し、プログラム立案の助言を受ける。 4. 可能であれば、指導を受けながら安全に運動療法等に参加的介入を行う。				
履修上の注意	各実習施設に応じて準備すること。				
成績評価方法	実習前評価[OSCE](20%)、実習施設評価(60%)、実習後評価[実習報告会](20%)				
教科書	特になし				
参考書	購入したすべての教科書				

講義計画・講義内容

1. 実習は臨床実習施設において7週間行われる。
2. 内容は、各施設における実習指導者の指導・監督の下、可能な範囲で複数の症例に対して理学療法評価(情報収集・記録・統合と解釈)を行い、治療計画を立案・実施する。
3. これまでの授業や実習で学んだ知識や技術を総動員し、臨床現場での様々な症例に対して理解を深める。
4. 学内においては実習前に実習前実技試験、実習終了後に実習報告会(発表)を行う。

臨床総合実習Ⅱでは、臨床実習指導者の指導・監督のもと、臨床総合実習Ⅰで修得した技術を基にプログラムを作成し、治療を実施することによって、臨床現場に必要な基礎能力を養い、その適否や有効性について考察できる能力を修得する。臨床総合実習Ⅰよりもさらに学びを深め、評価から治療までの系統的な理学療法を構築できる能力を養う。

備考